

マルチメディア時代がやってきた

監事 青木 利晴



職業柄、マルチメディアの話題と片時も離れられない毎日である。しかもこれは日本だけではなく、世界中の政府・産業界・教育界や証券界まで巻き込んだフィーバーであり、今にもその時代がやってくるという錯覚しがちである。

25年近い昔、小規模だが今と似たフィーバーがあった。テレビ電話が今にも使われそうになり、当時NTTでは、何十台ものテレビ電話機を各所に設置し、加入者系はアナログのベースバンド伝送でネットワークを作って実地に試験を行った。テレビ会議室が社内に設けられ、テレビ信号の帯域圧縮や、広帯域交換等に多く研究者が取り組んだ。私もその一部に参加し、ベル研究所を訪問して、もう少しで追いつきそうであることを知り、意を強くしたことを覚えている。

しかしその後どうなっただろう。2～3年のうちにすっかり熱が冷めてしまった。試験期間が終って返ってきたテレビ電話機が床に積み上げられ、テレビ会議室に至っては来客用の観光コースの一つになり、いずれ世代が変わらなければ使わないだろうという評価になった。

あれから20数年、何が変わったか。光ファイバやLSIやデジタル処理技術は格段に進歩した。小さなワークステーションが昔のメインフレームコンピュータをしのぐ性能をもつようになり、PCがこんなに普及するとは思ってもみなかった。携帯電話やファクシミリも多数出回っているし、テレビゲームは若人に今や最もポピュラーな遊びとなっている。そして何といても世代が変わった。どうやら今回は本物のようだ。

しかし騒ぎの割には魅力的な新製品や新サービスが生まれていない。この不景気の下、企業はお互いに競争するよりも、市場を活気づけることがとにかく大事で、そのために手をつないで大合唱しているのかもしれない。だがこの学会の会員のかなりの人が永年の冬の時代を耐えて、B-ISDNやマルチメディアの研究を行い、現役の時代に何とか世に出したいと願っていたその出番が回ってきたと考えたい。我々自身のために4万人の会員や関連機関が使ってみるだけでも前向きな大きな力となるはずだ。

そのうち老後の生活を豊かにするマルチメディア機器がたくさん生まれるにちがいない。間もなく老人となる私にとって気がせく毎日である。